第四回　民博若手研究会　記録

実施日時：2012 年 12 月 9 日（日）　午前 11 時から 4 時 30 分
場所：第 3 セミナー室
出席者：足立、飯島、大川、奈倉、比留間、山田、渡会
　　ゲストスピーカー：浅川
記録：奈倉

１．発表者１：浅川晃広（名古屋大学）
　タイトル：北朝鮮帰還事業と戦後日本人概念
【内容】
1959 年から北朝鮮帰還事業が実施され、約 93,000 人が「帰還」した。これは、当時の在日朝鮮人の 15%を占めた。この帰還事業は 2 つの疑問が残る。1 つは、なぜ在日朝鮮人の人々は、明らかに生活水準の低下する北朝鮮への移住を果たしたのだろうか。もう 1 つは、当時の在日朝鮮人の約 64%が日本生まれであり、加えて、9 割以上が韓国に起源をもつことから、北朝鮮に戻ることは当事者にとって「帰還」だったのか、ということである。
以上の問題意識に基づきながら、本発表では、なぜ在日朝鮮人の北朝鮮への「帰還」という現象が発生したのかを明らかにするために、3 つの視座から考察を行った。
まず、マスコミ報道の役割である。当時、日本のマスコミが北朝鮮帰還事業に対する肯定的な報道を行ったことは、在日朝鮮人の帰国決断へ大きな影響をもたらした。
次に、「人道」という名の「排除」である。「自分の居住地を自由意思で決定するという人道上の原則が貫かれて、北朝鮮への帰還が実現しようとしているのは喜びにたえない」というように、人道的立場から帰還を支持するという立場を打ち出していた。しかし、その裏では当事者に対し、日本での定住・永住をするか、「母国」への帰還をするかという選択を迫り、言い換えれば、当時の日本人にとってそれは包摂か排除かという二項対立的な論理であった。更に、この論理の背後には、日本の「戦争責任」を解消する回路が隠されていた。北朝鮮側のプロパガンダを受け入れ、在日朝鮮人の「意志」にとって帰還を選択することを認める、ということで戦争責任を回避しようという目論見があったのである。
在日朝鮮人を包摂するか排除するかという二項対立的な論理は、敗戦にともなって変化した「日本人」概念とも関わりがある。これが 3 つ目の視座である。敗戦前、「日本人」は、「内地人」と「外地人」を含んでいたが、敗戦後、「外地人」は外国人化された。日本の法律では、血統を重んじるため、日本で生まれ、数世代を経た在日朝鮮人は「外国人」とみなされた。これが「排除」の原理、あるいは北朝鮮帰還の「自由選択」という考えへとつながっていったと考えられるのである。
本発表のテーマは、資料が限られていることや、当事者に帰還体験をインタビューすることが難しいため、貴重な報告であった。また、これまでの報告者が取ってきた人類学的、

歴史的視座と異なり、政策や世論の角度から「帰還」概念を検討したという点で、研究方法についても学ぶ点が多かった。

【質疑応答・コメント】

・在日朝鮮人の日本での生活世界との関わりはどうか？実際に帰還を選択した人のインタビューがあると、紹介してもらった政策をどう当事者が受け止めているかがわかる。

・「日本人」概念：外地人、内地人。外地人の外国人化。戦後「外国人」の設定のあり方。これと「帰還」がどのような内在的つながり？

・「引揚げ」とは言わないのか。

→満州のケースとは異なる。

・帰還事業でイニシアティブをとったのは？

→日赤が窓口。日本政府が積極的にやったわけではない。帰国船も北朝鮮が提供。

・北朝鮮が在日朝鮮人を呼び寄せるメリットは？

→南韓国との競争意識と関係がある。韓国に対する優位性を示すことできる。労働力の確保。わざわざ日本からやってくるというのがアピール材料になった。

・朝鮮総連が朝鮮学校を通じて二世に対する教育が影響していたのではないか。朝鮮学校へ子どもを送る家族が帰る傾向にあったのか？

→総連側の影響もあるだろう。日本マスコミの影響もある。

・彼らにとって北朝鮮に帰ることについて。朝鮮半島に帰るというエスニック的な故郷に帰る、という意識。故郷の考え方が韓国・北朝鮮にという区別がなかったのでは？

→血統によってアイデンティファイするという双方の理解。「北朝鮮の海外公民」。日本に出生しながら日本人とは認められない、かといって韓国・北朝鮮からきたわけではないため、アイデンティティクライシスに遭遇していた。「祖国」をもてる。

・（資料 p.3 について）：1959 年の時点で、本籍地を聞いたときに、北・南の区別を当事者がしていたのか？彼ら自身の認識として南北が分かれたのはいつ頃？戦後直後に「朝鮮人らしさ」が形成されたのか？

→韓国に起源があるから北朝鮮を政治的に支持するというのは直結しない。

・イスラエルへのユダヤの帰還と似ている。宗教がコアになっている。

・「エスニック」の概念について。「日本人」起源。明治以降に「日本人」概念が出来上がった。明治時代と戦後の日本人概念は一緒か？日本人のなかで「エスニック」というと、アイヌや沖縄を想起する。ナショナルな「日本人」なら理解できる。

→エスニシティとナショナリティのズレ。戦前神戸で裕福な華僑が大量に帰化した。

・帰還した人が 15%。多くの人が帰国していない。なぜ残ったのか？（アルジェリアに残った人の話と比較）。

→日本で定住した人のなかで１５％は多いと思う。でも打ち上げ花火で終わってしまっている。腕時計 100 個送ってくれなど言われたり、手紙で現地の状況を知ったりするよう

になったため。

・映画「かぞくにくに」(2012 年) に映画が制作されたわけ。故郷をどっちにするのかは「踏絵」のような経験。この事業の後に帰化する人が増えたという統計はないのか？

→1965 年に日韓国交正常化。「協定永住」ができたことにより、韓国籍をもっていれば協定永住が得られるので、韓国へ流れた。帰化が増えたとうデータはない。

・(パワポ資料 22 について)：第二世代は帰りたくないのが本音だとわかる。経済的要因以外にも何か理由があったのか？故郷という意識があったのか？

→第二世代にとって、明示的な故郷はない。

１．発表者２：飯島真里子（上智大学）

タイトル：帰還移民の戦争体験と記憶―フィリピン引揚者を事例として

【内容】

戦後直後、フィリピンから日本への引揚者は大きく 2 つのタイプがいた。1 つは、フィリピン日系人、即ちフィリピン人女性と日本人男性が婚姻関係を結ぶことによって生まれた混血の人々である。もう 1 つは、血統が日本人の人々である。彼らの多くが沖縄に引揚げたが、当事者たちは「強制送還」だと認識していた。本発表では、後者を対象とし、彼らが墓参団を組織して生まれ故郷のフィリピンへ一時的に「帰還」することを、引揚者中心の組織の設立とその役割、戦争体験の共有、記憶の創造から考察した。

引揚者の太平洋戦争についての記憶は、語られることがなく、沈黙が続いていた。その原因として、日本の加害者意識、記憶を語る場がなかったこと、辛い経験のため人に語る気持ちになれなかったこと、元日本兵による声のある体験談にかき消されていたこと、等が考えられる。こうした情況が、1964 年の「ダバオ会」の設立を機に変化した。「ダバオ会」が発行している会報『ダバオ』に、引揚者が戦争体験を語り始めたからである。加えて、『ダバオ』の「通信欄」を通じて尋ね人などが行われるようになり、引揚者のネットワークも形成されるようになった。

1968 年、第一回墓参団が結成された。遺骨収集、戦前に死亡した在留邦人の供養、日比親善交流を目的とし、16 日間の日程で実施された。当時参加者は喪服を着用しており、これは慰霊団の性格が色濃かったことを物語っている。2010 年の墓参団になると、引揚者の孫など、当事者以外の参加者が混ざるようになり、喪服着用で参加する人はほとんど見られなくなり、慰霊から観光（戦地観光）の性格が強くなっていった。墓参団に参加した人々の戦争体験の語りからは、日本軍と差異化し、フィリピン人の「アミーゴ」（友人）と同じように苦しんだ「被害者」としての認識がみられる。このように、戦争体験を「創造」していくプロセスをみることができる。

墓参団に参加する引揚者のフィリピンに対する語りは、戦争体験に限定されるものではなく、戦前・戦後を通してフィリピン（ダバオ）の地元社会とのつながりのなかで経験し

た、悲しみと嬉しさ、幼少の頃の楽しかった思い出が混在する生活の記憶の全体であった。つまり、当事者にとって、「ダバオでの移民体験」として記憶が連続しているのである。

最後に、墓参団という「帰還」のかたちにおける「帰還」現象の性格について、ノスタルジックな帰還、定住を前提としない帰還、戦後の国民国家形成のなかで、自分たちの居場所を失った人々の帰還、といった特徴が提示された。

【質疑応答・コメント】

・戦争体験と移民体験。戦争体験で語れない部分が「移民体験」として現れてくるのではないか。“Acts of Creation”は戦争体験に限らず、移民体験全体ということもできる。

・声をあげることのできなかった沈黙状態から「引揚者」が立ち現れてくるプロセス。

・なぜ墓参団を組むのか？個人や家族単位では行っていないのか？

→もとは慰霊塔をつくりたかったが、反日感情が強くてつくれなかった。防御策として墓参団というかたちで組織化した。また同時期に、パラオなどでも墓参団を組織したことで、流行になっていた。

・墓参団の参加者の多様性。「自分たちの居場所を失った人々の帰還」とあるが、若い人も「引揚者」意識はあるのか？

→ある。

・地元の人の日本人を見る見方の違い。

・引揚者は日本でコミュニティなどを共有していたとか、お互いに付き合っていたということはあったのか？

→ほとんどない。

・戦時観光（ダークツーリズム）はオーストラリアにもある。

・満州からの引揚者の体験は語られているが、フィリピンからの引揚者はそのメインストリームに入れなかったのか？

→人数が多くなかった。フィリピンの在留日本人は混血児。血統主義のため、父親が日本人なら日本国籍をもてるので、国籍はもっている。満州は帰国者が増えてから語られてきた。フィリピンは引揚が難しかった。オーラルヒストリーを使われたのも 1980 年代。

・市川発表とエスニックなホームに定住を前提としない帰還をする点が似ている。比較できそう。

・軍人との差異化の語りは引揚者全体に言えることなのか？

→南洋にいえるのでは？パラオ、フィリピン、沖縄など。

・墓に行く、というのが興味深い。ピエノワールの場合は学校、教会に行くことは見られたが墓に行くという現象は見られない。

・“Acts of silence”は沈黙を破っていく、という意味なのか？

→その通り。

・墓参団のフィリピンへの旅は毎年行われているのか？

→行っている。行くか行かないかを相談することも、彼らの楽しみになっている。
・沖縄では「引揚者」がそれほどめずらしくないのか？
→どこからいつ帰ってきたか、或いは沖縄戦を経験したかによる。
・引揚者ということを告白せずに生きていく人もいる。有名になっている人は台湾にもフランス（ピエノワール）にもいる。いつ、なぜ語られ始めるのか。
→自分の経験が社会にどう生かせるか、生かせる時期が来たときに語られる。
・故郷について。フィリピンは「第二の故郷」という認識が一般的か？
→言説レベル（オフィシャル）と感覚レベル（身体的な実践）の故郷認識がある。場や状況によって異なる。ナショナリティ、エスニックアイデンティティとも関係する。